

# 貨幣と資本

——商品・貨幣・資本(7)——(その1)

飯田 繁

- 4 貨幣と資本
  - a 貨幣の資本への転化
    - 剰余価値の源泉と生産——
    - (1) 流通過程では価値は増殖しない
    - (2) 労働力の商品化
      - 労働力の所有者と労働の所有者——
    - (3) 労働力の価値
      - ……以上本稿(7)(その1)
    - (4) 労働力の使用価値
  - b 資本運動のもとの貨幣運動
    - (1) 資本の諸形態と諸運動
    - (2) 資本の現実的流通過程
- 5 おわりに

## 4 貨幣と資本

### a 貨幣の資本への転化

——剰余価値の源泉と生産——

- (1) 流通過程では価値は増殖しない

商品から貨幣へ、さらに貨幣から資本へと社会関係は展開する。本稿(「商品・貨幣・資本」(1)―(7))は、“商品と貨幣と資本”のそれぞれの本質・運動関係を

一貫したテーマとして追及・把握しようと試みてきた。これまでの叙述では、資本があらわれるまえの段階での“商品と貨幣”の本質・運動関係が説かれていただけである。これからは、資本が登場する段階での“商品と貨幣”の本質・運動関係が問題となる。

しかし、これからの問題の焦点は、むしろ“貨幣の本質・運動”と“資本の本質・運動”とのちがいを明らかにすること、“資本運動のもとでの貨幣運動”を解明することのなかにある。というのは、資本が登場する段階での“商品と貨幣の本質・運動関係”の究明は、“資本運動のもとでの貨幣運動”の解明のなかに含まれているのだからである。そこで、これからまず第1に説かれなければならない問題点は、本質・運動のうえでの“貨幣と資本とのちがい”だ。しかし、この問題点はかんたんには片づけられない。はじめにひとこと触れるだけにとどめて、大事な問題点はなおあとに残そう。その合い間をぬいながら、貨幣と資本との“本質（そしてまた運動）のちがい”をすこしなりと心得たうえで、資本の発生問題を意味する“貨幣の資本への転化”の問題へすすもう。いいかえれば、資本の発生問題は、資本の本質がつかめなければ解けない。貨幣のばあいとおなじように。

資本は、げんじつの社会でしごく当然なこととして見られているように、ひとことではいえば“増殖して還流する価値”である。それは、一般的等価形態として本質規定される貨幣が“増殖せず・還流しない”のとまさに好対照である。そこで、資本の本質は、資本それじたいが機能・運動しようとしまい（擬制資本のばあい）と、“自己増殖して・還流する価値形態”として規定されよう。資本の成立に先行する単純な商品流通方式（ $W-G-W$ 、もっと正確にしめせば、 $W_1-G-W_2$ ）の  $G$  と、資本制的な商品流通方式（ $G-W-G$ 、もっとはっきりいえば、 $G-W-G'$ ）の  $G \cdot G'$  とは、ともに  $G$  というおなじ記号名ながらも、それぞれの本質・運動ではまったくちがう。前者はたんなる貨幣（「貨幣としての貨幣<sup>(1)</sup>」ともいわれる、しかし蓄蔵貨幣・支払手段・世界貨幣を限定包括する「貨幣」＝「貨幣としての貨幣」の概念とはちがう）、後者は「資本としての貨幣<sup>(2)</sup>」＝「貨幣資本」。  $W_1$

—G—W<sub>2</sub> では、W<sub>1</sub> と W<sub>2</sub> との使用価値(質的)転換が目指されており、G—W—G' では G の G' (G+ΔG) への価値(量的)増殖が志向されている。

- (1) (2) 「貨幣としての貨幣と資本としての貨幣とは、まず第1にはただそれらのちがった流通形態によって区別されるだけだ」(Das Kapital, Bd. I., S. 153. [傍点—原著者])。マルクスは、ここでかんたんには解けない多くの諸問題点をのこしたまま、2つの流通形態のちがいを(W—G—W と G—W—G [G']) にだけまず触れる。

“買うために売る” W<sub>1</sub>—G—W<sub>2</sub> 方式では G は増殖しない。G はここでは W<sub>1</sub>, W<sub>2</sub> の一般的等価形態としてそれぞれの商品価値をほんらいそのまま(価値どおりに)実現して出発点から遠ざかり、元へはもどらない。さいしょの W<sub>1</sub> を売り、受けとった G を手ばなして代わりに入手する W<sub>2</sub> は、W<sub>1</sub> のさいしょの所有者・売り手にとっては、使用価値として消費されるのだから、さいしょの W<sub>1</sub>, G との縁は切れる。W<sub>1</sub> の売り手の手に復帰・還流するかにみえる“売った W<sub>1</sub> の転化形態としての G” は、じつは同種類の新しい W<sub>1</sub> の再販売によって新たに入手される G であって、さいしょの W<sub>1</sub> の転化形態としての G ではない。<sup>(3)</sup> W<sub>1</sub>—G—W<sub>2</sub> の G は還流しないという意味で、この方式の G は「最終的に支出される」<sup>(4)</sup>。

- (3) 「貨幣は、おなじ流通過程の更新または繰りかえしにより、新商品にたいして帰ってくる」(Das Kapital, Bd. I., S. 120. [傍点—原著者])。「……出発点への貨幣の還流がおけるとすれば、ただ全コースの更新またはくりかえしによるだけのことだ。……わたくしが2番目のクォーターの穀物を買えば、貨幣はわたくしのもとにかえてくる。しかし、それは1番目の取引の結果ではなく、ただ取引のくりかえしの結果にすぎない」(a. a. O., Bd. I., S. 156. [傍点—原著者])。Vgl. Zur Kritik, S. 90. なお、本稿の(4)〔岐阜経済大学論集〕第14巻第1号、昭和55年3月、39ページ)参照。
- (4) 「W—G—W の流通では、貨幣はけっきょく使用価値として用いられる商品に転化される。だから、貨幣は最終的に支出される (ist ausgegeben)」(Das Kapital, Bd. I., S. 155. [傍点—原著者])。「W—G—W 循環は、1商品の極から出発して、他商品の極で終わる。あとの商品は流通から出て消費にはいる。だから、消費・欲望充足、ひとことでいえば、使用価値がこの循環の最終目的である」(a. a. O., Bd. I., S. 156. [傍点—原著者])。

ところが、“買うために売る”の命題を逆転する“売るために買う”G—W—

G (G') 方式では、出発点の G は増殖をめざして「前貸しされる (wird vorgeschossen) だけ」<sup>(5)</sup> のことだ。いかえれば、G は「最終的に支出される」のではなく、あくまでも G' (増殖した G) として起点に復帰・還流しなければならない。万が一にも「前貸しされた」G が目的に反して増殖しないで還流したり、あるいは仮に増殖しても起点に還流しなかったりしたならば、G は資本に転化しなかったことになる<sup>(6)</sup>。しかも G の増殖には切りがない。使用価値の質的転換 ( $W_1 - G - W_2$ ) はその場・その場で限定されるのにたいして、価値の量的増殖をねらいとする  $G - W - G'$  の運動は無制限である<sup>(7)</sup>。ところで、G が増殖するためには、所有者・機能者の手中にいつまでもとどまっていたはず、いさぎよく手ばなされなければならない<sup>(8)</sup>。「可愛い子には旅させよ」。基本的には G は W に転化する ( $G - W$ ) のでなければ、資本 (G) に転化できない<sup>(9)</sup>。G は流通過程 ( $G - W$ ,  $W - G$ ) を経なければならないが、流通過程のなかでは増殖しない<sup>(10)</sup>。では、貨幣はなぜ、どこで、どのようにして増殖し、資本に転化する<sup>(11)</sup>のか。いわゆる“剰余価値”の源泉はどこにあるのか。

(5) Vgl. Das Kapital, Bd. I., S. 155. (傍点—原著者)。

(6) 「…… $W - G - W$  の流通では、貨幣の支出は貨幣の還流とは関係しない。これとはちがひ、 $G - W - G$  では貨幣支出じたいの様式によって貨幣は還流しなければならないものとなっている。貨幣の還流なしには操作は不成功におわり、あるいは過程が中断され・未了のままとなる。買いを補充し終結する売り・第2段階が欠けるのだから」(a. a. O., Bd. I., S. 156.)。

(7) Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 158, 159.

(8) 「……貨幣蓄蔵者が狂気の資本家だとすると、資本家は理性的な貨幣蓄蔵者である。貨幣蓄蔵者が熱望する不休の価値増殖は、貨幣を流通から救いあげようとするのだが、より賢明な資本家は貨幣をたえず新たに流通へ投入することによって達成する」(a. a. O., Bd. I., S. 160-1. [傍点—原著者])。

(9) 「商品形態をとることなしには、貨幣は資本にならない」(a. a. O., Bd. I., S. 162. [傍点—原著者])。

(10) 「……資本は流通からは発生しえないが、おなじく流通からは発生しえないのでもない。同時にまた、資本は流通のなかで発生しなければならないが、流通のなかで発生すべきものでもない」(a. a. O., Bd. I., S. 173.)。「貨幣所有者の蝶(資本家—飯田注)

への発展は、流通部面でおこななければならないが、流通部面でおこるべきものでもない。これが問題の諸条件だ。ここがロードスだ、サア飛べ!(Hic Rhodus, hic salta!)(a. a. O., Bd. I., S. 174. [傍点—原著者])。

- (11) 「……この過程 (G—W—G) の完全な形態は G—W—G' であって、そのさい G' = G + ΔG はつまり最初に前貸しされた貨幣額プラス増殖分である。この増殖分、いいかえれば最初の価値をこえる超過分をわたくしは剰余価値 (Mehrwert [surplus value]) と名づける。だから、さいしょに前貸しされた価値は流通のなかで自己保存するだけでなく、流通のなかでその価値の大きさを変え、剰余価値をつけ加える、いいかえれば、価値増殖する。そしてこの運動が価値を資本に転化する」(a. a. O., Bd. I., S. 158. [傍点—原著者])。この文章を素朴に解釈すると、G' = G + ΔG のなかの剰余価値 (ΔG) はさも流通 (W—G') のなかで生まれるかのようにみえる。しかし、単純にそう解釈してはならないのであって、あとで見るとにじつは、価値増殖は流通のなかでおこるのではない。かといって、価値増殖の解明には流通が無視されてはならない、という大事なポイントが W—G—W との対照 (G—W—G' では流通序列が逆転されているだけではなく、第1段階 G—W のなかでの W のきわだつ特性) でつよく指摘されているのだらう。

なお、利潤の源泉論としての“剰余価値の形成論”は、商品の2要因(使用価値と価値)を決定する“労働の2重性論”とともに、唯物弁証法で貫徹されているマルクス経済学の枢軸をなしている。エンゲルスはマルクスの死を悼むことばのなかでマルクスの剰余価値論にふれてこうのべている。「ダーウィンが有機的自然の発展法則を発見したように、マルクスは人間史の発展法則を発見した。……マルクスは、こんにち資本主義的生産様式の、そしてそれによってつくりだされたブルジョア社会の、特殊な運動法則をも発見した。剰余価値の発見とともに、ここで突然に光がともされた。……2つのこのような発見は生涯にわたり満足すべきものだらう。その1つの発見だけでもはたせる人は幸せである。……」(F. Engels, Das Begräbnis von Karl Marx [“Der Sozialdemokrat” Nr. 13. vom 22. März 1883], Karl Marx / Friedrich Engels Werke, Dietz Verlag, Berlin 1962, Bd. 19, S. 335-6.)。

マルクスはじぶんの積極的な主張(剰余価値の形成論)にはいるまえに、まずありふれた“流通過程のなかでの価値増殖”一辺倒論にふれ、きびしく批判している。流通過程のなかだけでは価値は増殖しない、ということを立てるために。そもそも商品の売り手と買い手は互いに使用価値のうえでは利得し合うとしても、価値のうえではなんの利得もえない<sup>(12)</sup>。それなのに、“流通によって

価値の利得が生まれる”というコンディヤック (Condillac) の構想 (“流通のなかでの価値増殖”論) はしよせん “使用価値と価値との混同”論にもとづくもので、とマルクスは指摘する。商品<sup>(13)</sup>はほんらい価値どおりに売られ・買われる (等価交換される) のであって、価値のうえでは売り手・買い手両者にとってなんの利害・増減も生じないわけは、商品の売買が商品から貨幣へ、貨幣から商品への (その序列が逆転されても) 形態<sup>(14)</sup>転換を意味するだけのことだからである。そこで、まず、流通過程のなかで諸商品が価値以上に売られ、または価値以下に買われることによって価値が増殖するという謬論にマルクスは<sup>(15)</sup>ふれる。こうしてマルクスはつぎのように結論する。「剰余価値の形成、つまり貨幣の資本への転化は、だから売り手たちが諸商品をそれぞれの価値以上に売ることによっても、また買い手たちが諸商品をそれぞれの価値以下で買うことによっても、説明<sup>(16)</sup>されうるものではない」。

12 「使用価値が問題であるかぎりでは、交換者双方が利得できるのは明らかである。双方とも自分には使用価値として不用な諸商品を譲渡して、自分の使用に必要な諸商品をうけとる。……だから、使用価値にかんしては、“交換は、双方がそれで利得する取引である”といえる。交換価値についてはそうでない。……諸商品の価値は、諸商品が流通にはいるまえに、それらの諸価格に表示されており、したがって流通の前提であって結果ではない」(Das Kapital, Bd. I, S. 164-5. [傍点—原著者])。「……交換者双方は、使用価値にかんしては利得できても、交換価値については利得できない。むしろ“平等のあるところには、利得はない”という言葉のとおりだ」(a. a. O., Bd. I, S. 165. [傍点—原著者])。

13 「……商品流通を剰余価値の源泉として描写しようとする試みの背後には、たいいていのばあい1つの取り違え (ein quid pro quo), 使用価値と交換価値との混同が潜伏している」(a. a. O., Bd. I, S. 166. [傍点—原著者])。

14 「この形態転換は、ほんらい (an und für sich) 1枚の5ポンド券をソヴレン、半ソヴレン、そしてシリングと両替するのとおなじく、価値量の変化をなにも含んでいない。だから、商品の流通が商品価値の形態転換だけをひきおこすものであるいじょう、現象が純粋にすすめば、等価物の交換をひきおこす」(a. a. O., Bd. I, S. 165. [傍点—原著者])。「……商品交換は、その純粋な姿態では等価物の交換であって、したがって価値で増殖するための手段ではない」(a. a. O., Bd. I, S. 166. [傍点—原著者])。

15 「剰余価値が、名目的な価格ひき上げから生まれてくるのだ、商品をととも高く売

る売り手の特権から出てくるのだ、といった妄想(Illusion)に徹した代表者らは、だから、売らないで買うだけの、したがってまた生産しないで消費するだけの1つの階層を想定している。こんな階層の存在はわれわれのこれまでに到達した観点、単純な流通からはまだ説明されえない。しかし、われわれは先どりしよう。……だが、それでもなお、……これは利殖あるいは剰余価値形成の方法にはならない」(Das Kapital, Bd. I., S. 169-170. [傍点—原著者])。

「さて、売り手になにかある1つの不可解な特権があたえられ、売り手が商品をその価値以上に、その価値が100なら110に、つまり、10%の名目的価格ひき上げて売ることができると仮定しよう。すると、売り手は10の剰余価値を取得する。しかし、かれは売り手であったのちには、買い手になる。ある第3の商品所有者がこんどはかれにたいして売り手としてあらわれ、10%高く商品を売る特権を自らのしむことになる。さきのわれわれのご仁は、買い手として10を損するために、売り手として10を儲けていたわけだ。すべての商品所有者がそれぞれの諸商品をたがいに10%だけ価値以上に売るのは、まさにかれらがそれぞれの諸商品をそれらの価値で売ったのとまったく同じだ、ということに全体は事実上帰着する。こうした一般的・名目的な諸商品の価格ひき上げは、ちょうど諸商品価値がたとえば金ではなく銀で評価されたのと同じ結果をもたらす。貨幣名、すなわち諸商品価格は増大しようが、しかし諸商品の価値比率はなにも変わらない」(a. a. O., Bd. I., S. 168. [傍点—原著者])。

「流通では生産者と消費者とは、ただ売り手と買い手としてあい対する。生産者にたいする剰余価値は、消費者が商品をその価値以上に支払うことから生まれると主張すれば、ただつぎの簡単な命題を仮装するだけのことだ、商品所有者は売り手としてはとても高く売る特権をもっているのだ、と。売り手は商品をじぶんで生産したか、またはその生産者を代表するか、だ。しかし買い手もそれにおとらず、かれの貨幣に表示されている商品をじぶんで生産したか、あるいはその生産者を代表するか、だ。だから、生産者は生産者とあい対する。かれらを区別するものは、一方が買う、他方は売るということだ。商品所有者が生産者という名で商品をその価値以上で売り、消費者という名でとても高く支払うというのでは、問題の解決は1歩もすすまない」(a. a. O., Bd. I., S. 169. [傍点—原著者])。

「諸商品をそれぞれの価値以下で買う買い手の特権がある、とわれわれは逆に想定しよう。ここでは、買い手がふたたび売り手になる、とおもい出す必要はもうない。かれは買い手になるまえに売り手だった。かれは買い手として10%儲けるまえに、すでに10%を失っている。すべてはまたも、元のままだ」(a. a. O., Bd. I., S. 168. [傍点—原著者])。

商品生産者・売り手に、あるいは商品消費者・買い手に、“なぜか”あたえられて

いると妄想されている“特権”が、たとえ一率値上げ・一率値下げではない、としても、流通過程での売り買いとの（買いと売りとの）プラス・マイナスは全体としては相殺される。けっきょく不等価交換される諸商品は全体としては価値どおりに実現されるのであって、流通過程では価値の増殖はみられない。個別的な利害・価値の再分配現象・経済関係への反作用は見のがせないとしても、「A はかれの40ポンド・スターリングを50ポンド・スターリングに転換して、より少ない貨幣をより多い貨幣にして、その商品を資本に転化した。もっと詳しくみよう。交換のまえにはわれわれは、40ポンド・スターリングのワインをAの手に、50ポンド・スターリングの穀物をBの手に、90ポンド・スターリングの総価値をもっていた。交換ののちには、われわれは90ポンド・スターリングの同一総価値をもっている。流通する価値はみじんも増えていない。AとBとのあいだの価値の分配は変わった。一方で剰余価値（Mehrwert）としてあらわれるものは、他方では縮減価値（Minderwert）である。一方でプラスとしてあらわれるものは、他方ではマイナスとしてあらわれる。かりにAが交換のおおわれた形態なしに、Bから10ポンド・スターリングをじかに盗んだとしても、おなじ変化がおきたろう。流通する価値の総額はそれらの分配での変化によって明らかにふやされえない」（Das Kapital, Bd. I., S. 170. [傍点—原著者]）。

- (16) a. a. O., Bd. I., S. 168. (傍点—原著者)。「……どちらへ転ぼうと、総額はまえと同じだ。等価物が交換されるのであれば、剰余価値は成立しないのだし、また不等価物が交換されても、おなじく剰余価値は生まれえない。流通あるいは商品交換は価値をつくらない」（a. a. O., Bd. I., S. 170-1.）。

マルクスはかなりの紙面をさいて、価値増殖（剰余価値の形成）が流通過程のなかではみられないことを延々と論証にこれつとめているようである。というのは、もしマルクスが持論の“剰余価値形成論”をここでいきなりぶっつけたならば、並みいる“流通過程での価値増殖論者たち”はおそらくそれに耳を傾けないだろう、とマルクス自身が判断してのことだろう。価値増殖が流通過程のなかではおこらないということは、単純な商品流通様式のもとだけではなく、これからはいる資本主義的な商品流通様式のもとでもだ。流通過程のなかでは、単純な商品流通様式のもとであろうと、資本主義的な商品流通様式のもとであろうと、商品も貨幣もたんなる商品・たんなる貨幣としてそれぞれ機能し、価値が形態転化する（増殖するのではなく、転形する）だけなのだから。あとで資本の総過程との関連でこのことをもっとよく見よう。

では、貨幣の資本への転化(剰余価値の形成)は、流通外のどこでおこなわれるのか。マルクスはいう。「以上で明らかになったのは、剰余価値が流通からは生じえないということ、したがって剰余価値の形成においては流通それじたいのなかでは見えないその背後にある何かがおこななければならないということである。しかし、剰余価値は流通とはちがうどこから生じうるのか」<sup>(17)</sup>と。すると、剰余価値形成上の問題点は、まずその「流通それじたいのなかでは見えないその背後にある何か」を追究すること、「剰余価値は流通とはちがうどこから生じうるのか」を探すことだ。

(17) a. a. O., Bd. I., S. 172-3. (傍点—原著者)。

## (2) 労働力の商品化——労働力の所有者と労働の所有者——

資本主義的な商品流通方式( $G-W-G'$ )ではさきにみたように、単純な商品流通方式( $W_1-G-W_2$ )とはちがひ、価値は $G$ の形態からはじまり一周して $G'$ ( $G+\Delta G$ )の形態へ増殖・復帰する。しかし、 $G'$ はさらに同じ運動の再出発点となり、 $G'$ の価値増殖をくりかえし無限につづける。価値増殖運動の出発点となる $G$ は、もともと「商品流通のさいごの生産物」<sup>(1)</sup>であった。というのは、単純な商品流通方式のもとの出発点・ $W$ の転化形態・一般的等価形態としての $G$ は、単純商品流通の向上につれて機能密度・領域を広げながら最終的には世界貨幣として商品流通の諸国に展開される世界的視野に立つことになるのだからである。価値増殖が目標・問題視点におかれるばあいには、商品の個別的な使用価値姿態から解放された価値存在・一般的等価形態・ $G$ だけが始点・終点( $G'$ )として選出されることになる。ところが、そのばあい、出発点立つ $G$ は、さきにもちょっとふれたように、現実的にほんらい $W$ に転化しないでは $G'$ に増殖しない(「商品形態をとることなしには、貨幣は資本にならない」)。では、 $G$ が転化してゆくその $W$ とは、どんな商品なのか。それは流通過程から吸いあげられた生産過程( $G-W-G'$ の簡略された方式ではまだ内容表示されていない)で、価値形成・増殖する労働を提供する商品でなければならない。つま

り、使えば労働となり、価値をつくり・ふやす本体となる商品<sup>(2)</sup>でなければならない。だから、それは“使えばその使用価値とともに価値もなくなる”<sup>(3)</sup>ような普通商品とはちがう。そんな商品、独特な商品 (eigentümliche Ware)<sup>(4)</sup>・特殊な商品 (spezifische Ware, spezifischer Artikel)<sup>(5)</sup> とたまたま出あい (いまはあたりまえなこととなっているが)、これ幸いとばかり一括して買いとり、自分のもっている生産手段と結合して価値増殖をとげることに成功し、いちやく資本家に転身した貨幣所有者の“ひとつの特別な僥倖”<sup>(7)</sup>！はいったいどのようにして成立することになったのか。マルクスは、その商品を労働力とみるのだが、叙述の段階ではまず理論的分析に傾倒して、その具体的・歴史的なあとづけは例によって後回しにされる (『資本論』第7篇第24章「いわゆる本源的蓄積」で)。はじめ<sup>(8)</sup>には、だから、ただ歴史的事実が前提されたうえで、日常くりかえされている貨幣の資本への転化が理論的に解明される。そこで、まずさいしょに明らかにされねばならないことは、貨幣が資本に転化するために貨幣がだいいちに取りかねばならない商品形態はなにか、であった。その商品形態の特殊性をとらえることによって、剰余価値問題の焦点・「流通それじたいのなかでは見えないそれの背後にある何か」を、そしてまた「剰余価値は流通とはちがうどこから生じうるのか」をつかめることにもなる。

(1) 「商品流通のさいごの生産物は資本のさいしょの現象形態である」 (Das Kapital, Bd. I., S. 153. [傍点—原著者])。

(2) 「資本に転化すべき貨幣の価値変化は、この貨幣じしんでおこりうるものではない。……等価が交換されるのであって、商品はその価値どりに支払われるのだからである。それで、変化は商品の使用価値それじたいから、すなわちこの商品の消費だけからおこりうる。ある商品の消費から価値をひきだすためには、われわれの貨幣所有者は流通面の内部で、市場でその使用価値じたいが価値の源泉であり、したがってその商品の現実的な消費がそれじたい労働の対象化、つまり価値創造であるといった独特な素質をもつ1つの商品を見つける幸運にめぐまれなければならない。そして貨幣所有者は市場でこうした特殊な商品を発見する——労働能力または労働力である」(a. a. O., Bd. I., S. 174-5. [傍点—原著者])。

(3) 「使用価値がなくなれば、価値もなくなる」 (a. a. O., Bd. I., S. 211.)。

- (4) Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 178, 183.  
 (5) Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 175, 181.  
 (6) Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 178.  
 (7) Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 202.  
 (8) 「……貨幣を資本のさいしょの現象形態として認識するためには、資本の成立史を振りかえる必要はない。おなじ歴史が日々われわれの眼のまえで演じられている」(a. a. O., Bd. I., S. 153.)。

ここでかんたんに結論を先どりしてひとこというと、剰余価値は生産過程でおこなわれる剰余労働の結晶・生産物である。その剰余価値は、“労働力商品の価値”をつくるのに必要な労働時間以上の労働時間・剰余労働時間の産物だが、“労働力商品の使用価値”から出てくるものとして買い手の所有となる。つまり、流通過程で労働力を商品として買いとり、じぶんのものとなる労働力商品の使用価値・労働を「流通それじたいのなかでは見えないそれの背後にある」、そしてまた「流通とはちがう」生産過程でじぶんのもつ生産手段と結合すれば、買いとるさいに支払ったその労働力の価値をこえる剰余価値部分をば労働の産物として買い手である貨幣所有者→資本家は自分のものとして手におさめる。労働力が商品として流通過程にあらわれ、商品として売買されるからには、商品(労働力)の所有者・売り手は商品の価値(賃金)をうけとり、貨幣の所有者・買い手が商品の使用価値(労働)を手に入れるのは当然だ。しかも、ほんらい、商品の使用価値は買い手のものとしてどのように処理されようと、商品を手放した売り手・貨幣うけとり人にとってはどうでもよいことだ。普通商品のばあいは、まったくそのとおりだが、労働力商品のばあいはちがう。労働力は所有者・売り手の体内にあるのだから、売り渡し・買いとり後も買い手の思うままに処理することは、人道上ゆるされない。労働日・労働条件をめぐる長い闘争史<sup>(9)</sup>が展開されたわけだ。それにしても、労働力が商品として売買されるということは、売り手・買い手が等価交換する対等の自由人どうしとして、労働力の価値(価格・賃金)と引きかえに売り手・賃金労働者が労働力の使用価値(労働)を買い手・資本家に譲渡することを意味する。だから、労働力

の所有者は、体内の労働力を日ぎめ・週ぎめ・月ぎめなどで商品として売る賃  
労者であるが、労働の所有者は、労働力を商品として買いとり・その使用価値  
をうける資本家だということになる。ここで労働力と労働とのちがいが強調さ  
れている。“労働力”商品の価値と、“労働力”商品の使用価値（労働）がつく  
りだす価値との量的差額が問題の焦点となるのだから。ところで、“労働力の  
使用価値（労働）”からでてくる価値が、どんなに“労働力の価値”を上回ろう  
とも、買い手のものとなるのは、商品交換・商品流通上の原則にてらしてと  
うぜんなことである。「……労働力の使用が1日間につくりだす価値は労働力じ  
しんの日価値の2倍の大きさだという事実は、買い手にとってひとつの特別な  
僥倖でこそあれ、けっして売り手にたいする不正なことではない」<sup>(11)</sup>。いかにも  
資本家の剰余価値→利潤取得を正当づけ・擁護しているやにみえるこの1文  
は、商品交換の原則をわきまえないかぎり、理解できないだろう。剰余価値の  
形成・資本主義の存立の本源は労働力の商品化に根ざしている。私有制度のも  
とでの“労働力の商品化”が消えないかぎり、資本主義は存続しつづけるのだ  
ろう。

(9) Vgl. Das Kapital, Bd. I., S. 239-317.

(10) 「労働者は、かれの労働を所有する資本家の管理下で労働する」(a. a. O., Bd. I., S.  
193. [傍点一原著者])。「商品の使用は商品の買い手のものだ。労働力の所有者はかれ  
の労働をひきわたすことによって、じっさいに、かれから売られた使用価値だけをわ  
たしたことになる。かれが資本家の作業場にはいった瞬間から、かれの労働力の使用  
価値、したがって労働力の使用、労働は資本家のものとなった」(a. a. O., Bd. I., S.  
193. [傍点一原著者])。「労働力の価値と労働過程での価値増殖とは2つのちがう大  
きさである。資本家が労働力を買ったときは、この価値差額を眼目においたわけだ。…  
…決定的なものは、この商品の特殊な使用価値、すなわち価値の源泉、しかも商品  
それじしんがもつ価値以上の価値の源泉であった。これこそは、資本家はその商品に  
期待をかける特殊な用途である。そしてかれは、そのさい商品交換の永遠の諸法則に  
そって行動する。じっさいに労働力の売り手は、どの他の売り手もするように、商品  
の交換価値を実現して、商品の使用価値を譲渡する。かれは使用価値を手放さない  
では、交換価値を受けとれない。労働力の使用価値、労働そのものは、売られた油の  
使用価値が油屋のものでないのと同じように、その売り方のものではなくなる。貨幣所

有者は労働力の日価値を支払った、だから、その日のうちの労働力の使用、すなわち1日中の労働はかれのものだ」(a. a. O., Bd. I., S. 202. [傍点—原著者])。

(11) a. a. O., Bd. I., S. 202.

叙述をもとへもどして、労働力という商品の特殊性についてもうすこしよく見ることにしよう。労働力は、商品になろうとなるまいと、もともと労働の源泉である。労働の2重性を説くはじめの段階でマルクスは労働力と労働についてこうのべている。「生産的活動の限定性、そしてだから、労働の有用性を論外とすれば、労働にのこるものは、労働が人間労働力の支出であるということだ。裁縫と機織りとは、質的にちがう生産的活動であるが、どちらも人間の頭脳・筋肉・神経・手などの生産的支出であって、この意味ではどちらも人間労働である。それらは人間労働力を支出する2つのちがう形態である<sup>(12)</sup>」。「すべての労働は、一方では生理学的意味での人間労働力の支出である。そしてこの同一の人間労働、すなわち抽象的人間労働の属性では、労働は商品価値をつくる。すべての労働は、他方では特定の目的に限られた形態での人間労働力の支出である。そして具体的な有用労働のこの属性では、労働は諸使用価値を生産する<sup>(13)</sup>」。また、労働力が商品として登場する段階でも、おなじような内容があらこちらに記されている。「労働力または労働能力 (Arbeitskraft oder Arbeitsvermögen) をわれわれはつぎのように理解する。ひとりの人間がなんらかの使用価値を生産するたびごとに実現させているところの、人間の肉体・生きる個性のなかで生存する肉体的・精神的な諸能力 (Fähigkeiten) の総括である<sup>(14)</sup>」。

(12) Das Kapital, Bd. I., S. 48-9. (傍点—原著者)。

(13) a. a. O., Bd. I., S. 51. 「流通状態にある人間労働力、いいかえれば人間労働は価値をつくるが、価値ではない」(a. a. O., Bd. I., S. 56.)。

(14) a. a. O., Bd. I., S. 175. ¶(傍点—原著者)。「……労働力はただその支出によってしか実現されない、すなわち労働のなかでしか実現されない。しかし、労働力の実現、労働によって人間の筋肉・神経・頭脳などの一定量が消費される」(a. a. O., Bd. I., S. 178. [傍点—原著者])。

労働力が商品として流過程のなかで売買されるということは、単純な商品

流通方式のもとでは想像もされなかった。そこでは、労働力の所有者は、生産過程で労働力の使用・労働と結合されねばならない生産手段（労働手段・労働対象）の所有者でもあったのだから。労働力と生産手段とをともに所有していた独立生産者は生産過程で労働と生産手段とを自力で結合し、商品（ $W_1$ ）を生産して、これを自分のものとして流通にながし、じぶんの必要とする商品（ $W_2$ ）と交換した。だから、そのさいに、独立生産者がもしも自分の労働力を商品として売ろうものならば、独立の商品生産者としてのじぶんの生命をみずから断つことにもなろう。労働力の商品化は、労働力の所有者がもはや生産手段の所有者ではなくなり、したがって独立生産者・単純商品生産・流通業者ではなくなった段階ではじめてあらわれ、一般化された事象である。

近代的資本主義の母国・イギリスで15—16世紀ごろからはじまった第1期、18—19世紀の第2期にわたるエンクロージャー（囲い込み）運動によって、土地をはじめとする生産手段を収奪された小作農民たちは、それまでじぶんの生産手段と結合してみずから使用していたじぶんの労働力をいまや生命維持のために“商品”として売るほかはない苦境においこまれることになった。これに対する労働力商品の買い手は、一括買いを可能にする一定大量貨幣の集積者・所有者であった。労働力所有者・売り手は労働力（そしてせいぜい身の回り品）以外にはなにひとつもっていないのだから、労働力の買い手はそれを使用・結合させる生産手段だけではなく、さいしょには労働力所有者・売り手の必要とする生活資料などまでも用意しなければならなかった。一方の労働力所有者・売り手は賃労働者に、他方の大量貨幣所有者は資本家（近代的な）に転身。量の増大は質の転換への契機となる。大量貨幣はもはや貨幣ではなく、質的にちがう資本に転換する。弁証法のいわゆる“量の質への転換”。「生産のために前貸しされる最低額が中世の最高額をはるかにこえるばあいにはじめて、貨幣・商品所有者は現実に資本家に変質する。たんなる量的な変化がある一定点にまで達すると、質的な差異に転化する、というヘーゲルによってかれの論理学で発見された法則の正当性が自然科学でとおなじく、ここでも論証される」<sup>(16)</sup>

- (15) Vgl. Das Kapital, Bd. III. Tl. I., S. 354-69. Vgl. a. a. O., Bd. III. Tl. II., S. 641-59.
- (16) a. a. O., Bd. I., S. 323. (傍点—原著者)。

労働力商品の特殊性は、普通商品 (gemeine Ware) や一般商品 (allgemeine Ware, 貨幣) が所有者の体外にあるのにたいして、労働力商品は所有者の体内にあるという原点にもとづいている。一方では、人間がじぶんの体内にある労働力を商品として売り、また他方では、他人の体内にある労働力を商品として貨幣で買いとるということは、商品売買の既成観念ではちょっと考えられない事態であろう。そこで、商品としての労働力と、人間としての労働者とがとかく混同されがちともなろう。どこかの国の“労働力調査”が“労働者調査”の意味でおこなわれているようだ。労働力という名称が知的にれいれいしく使われているかぎり、労働力は労働者の所有物・商品であることがしっかりと理解されていなければならない。それなのに、かりにも、なにげなく労働力と労働者とが同一視されようものならば、“剰余価値の解明原理”としての“労働力の商品化”とは“労働者の商品化”のことかと不審がられる始末にさえなりかねない。人間の商品化はかつて奴隷の商品化にみられた。他人の所有物・商品として売られ・買われる人間が奴隷であった。ところが、労働者（賃金労働者）は労働力という商品の所有者・売り手としては貨幣の所有者・買い手とまったく対等な立場にあり、<sup>(17)</sup> 2重の自由をもつ独立人間としての人格をそなえている。とはいっても、労働力所有者として労働者が自由だというのは、貨幣所有者と向かい合う流通過程でのこと、ひとたび労働力を商品として売ったら、あとはちがう。労働者は労働力を商品として売っても、労働力をじぶんの体内から切りはなして買い手にもっていてももらうことはできない。労働者は、売った商品・労働力の使用価値を買い手に譲渡するためには、さきにも見たように、買い手の作業場にみずから出かけていって、そこに備えてある生産手段を動かし・使ってみずから労働しなければならない。労働は労働者・売り手の完全な自由のもとにあるのではなく、資本家のきびしい管理下におかれる。労働

の合い間に設けられる“休憩時間”もじつは労働者のためにあるのではなく、“労働の所有者”・資本家のためにある！ 労働効率を高めるために！！ ところで、所有者じしんの体内にある労働力商品の特殊性は、その価値と使用価値の内容をみれば、いっそうはっきりする。

(17) 「……貨幣の資本への転化のためには、貨幣所有者は自由な労働者を商品市場で見つけねばならない。2重の意味で自由な、すなわち、労働者が自由な人間としてかれの労働力をじぶんの商品として処理すること、また他方では売べき商品をべつに何ひとつもっていないこと、かれの労働力の実現に必要ないっさいのものから解放され・自由であること、だ」(Das Kapital, Bd. I., S. 176. [傍点—原著者])。「資本は、生産手段と生活手段の所有者が自由な労働者をじぶんの労働力の売り手として市場で見つけるばあいだけに成立する。そしてこの1つの歴史的條件は1つの世界史を包括している」(a. a. O., Bd. I., S. 178. [傍点—原著者])。「労働力の買いと売りとかおこなわれている流通または商品交換の部面は、じつのところ天性人權のまことのエデンであった。ここで支配するものは、ただ自由、平等、所有、そしてペンサムである。自由！ なぜなら、1商品、たとえば労働力の買い手と売り手は、かれらの自由意思でしか規定されないのだから。かれらは自由な、法的に対等な人間として契約する。契約は最終結果である。このなかでかれらの意思はひとつの共通な法的表現をうけることになる。平等！ というのは、かれらは商品所有者としてしか互いに関係しないし、等価と等価とを交換するだけのことだから。所有！ なぜなら、各人は自分のものを処理するだけだから。ペンサム！ なぜかといえば、両者のどちらにも、あるのは自分にかかわることだけだから」(a. a. O., Bd. I., S. 184. [傍点—原著者])。

労働力商品が労働者の体内にあるので、体外にある普通商品とはちがひ、売り手が買い手から受けとる価値も、また売り手が買い手にわたす使用価値も体内にかかわるものであって、ともに日ごとに更新・くりかえされなければならない内容要因である。売り手・買い手が対等の自由人として取りかわす売買(雇用)契約は長期的なものであろうとも、労働力商品の価値と使用価値の実態はその日・その日(一定時間)ぎめのものであり、<sup>(18)</sup> そういう単位を基礎として取り引き・算定されなければならない。というのは、労働力の価値は日々の労働力商品・体力の再生産費にあたり、労働力の使用価値はその日かぎり消費しつくされてしまう労働だからである。労働力が日々再生産されるのでなければ、ひ

とつの特徴な使用価値（価値形成・増殖の源泉としての労働）をほんらいもつ商品として日々売られえないのだから、労働者は自由な人間として生きてゆくためには自分の体内にある労働力を唯一の商品として日々売りながらも、その所有権をけって手放さない<sup>(19)</sup>。労働力の自由な所有者（賃労者）は、労働力・労働能力を日々商品として更新・切り売りしても、労働力・能力を根こそぎ永久に売りはらってしまうのではないのだから、労働の源泉としての労働力の所有権はちゃんと手もとに保持しつづける。他方、労働力を商品として買いとる資本家はその価値（賃金）を支払ってその使用価値（労働）をうけとり、労働の所有者になるとはいても、労働力の所有者になるのではない。もし、労働者が体内にある労働力の所有権を手放なして、もはや自分のものとして永久に取りもどせないのであれば、かれはじぶんの自由を売りはらって自ら奴隷化することになる<sup>(20)</sup>。ところが、体外にある普通商品のばあいだと、その所有者・売り手は買い手から貨幣をうけとって、その商品の所有権を買い手にわたす。商品の所有者は貨幣の所有者に、貨幣の所有者は商品の所有者に転化する<sup>(21)</sup>。そこでは、体外の商品と貨幣とがたがいに等価交換されたあと、いちど売られた商品が売り手のものとしてくりかえし売られるなどはまったく想像もされないことだ。そのわけは、普通商品にとってはしごく当たりまえな“体外存在性”のなかにある。だとすると、労働力商品の特殊性はまさに労働力商品の“体内存在性”のなかにある。そこからまた、労働力の価値と使用価値との特殊性がうまれることにもなる。

(18) (19) (20) 「……労働力の所有者は労働力をいつも一定の時間にかぎって売るよう求められる。なぜかという、もしか、かれが労働力をいっさいがっさいひっくり返して売りはらってしまうものならば、それこそ自分じしんを売ってしまうことになるのであって、ひとりの自由人から1奴隷に、ひとりの商品所有者から1個の商品に転化することになる。人間としてのかれは、たえずかれの労働力にたいしてはかれの所有物として、したがってまた自分じしんの商品として振るまわなければならない。かれがそうでありうるのは、かれがたえずただ一時的にだけ、一定時間幅にかぎって買い手に労働力を処理させ、労働力を消費させる、したがって労働力の売りわたしによって

労働力にたいするかれの所有権を放棄するのではないかぎりでのことだ」(a. a. O., Bd. I., S. 175. [傍点—原著者])。Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 180.

(21) 貨幣の所有者が商品(普通商品のばあい)の所有者となる、という、商品の買い手はさも使用価値だけでなく価値も新たにうけとるかのようである。ところが、商品の買い手は、その商品の価値部分を遅かれ早かれ貨幣形態で売り手にわたす。つまり、買い手は商品の価値を売り手に支払って、売り手から商品の使用価値をうけとって自分のものにする。ただ、所有対象となる使用価値が、普通商品のばあいには所有者の体外にある商品体のほかには存在しない有形・無形の自然的・物質的要因であるという点で、労働力商品のばあいとはまったくちがう。いうまでもないことだが、ここでは商品の貸借・利用ではなく、商品の売買が問題となっているのだから。

### (3) 労働力の価値

商品としての労働力じたいが、普通商品とは決定的にちがひ、労働者じしんの体力に総合される肉体的・精神的なエネルギー源であるので、労働力商品の<sup>(1)</sup>価値と使用価値のそれぞれの内容規定も、そしてまた両者の関係規定も特殊なものとなる。『資本論』のさいしよにみられるように、普通商品のばあいには、使用価値から価値への分析・叙述がおこなわれた。使用価値についてはしごく簡単に、価値についてはとても詳しく。ところが、労働力商品のばあいには、この分析・叙述の“序列”は価値から使用価値へと逆転されている。もちろん、普通商品のばあいにも、また労働力商品のばあいにも、“使用価値と価値”、“価値と使用価値”の分析・叙述はさいしよからさいごまで混在・再現している。しかし、普通商品のばあいには価値(→価値形態→貨幣)そのものの分析・叙述が延々とつづき、労働力商品のばあいには使用価値(労働)それじたいの叙述・分析が剰余価値の生産に——普通商品の使用価値・価値の生産に加えて——関連して長々と進められている。どちらにせよ、物質・自然関係としてのほんらいの使用価値そのものではなく、人間・社会関係としての価値が経済学の主要な研究対象である。その価値が、労働力商品のばあいには、その商品の使用価値の消費から生まれる(普通商品のばあいには、その“商品の使用価値”を消費すれば、それに含まれる“商品の価値”もなくなるのに)！、しかもその商品じたいのもつ価値

プラス剰余価値さえもが生まれるとは！ そんな“金の卵”を商品として見つけ、これ幸い！と大量に買いとれる貨幣所有者が剰余価値の生産源である労働力の使用価値・“労働”をわがものにできる幸運を味わえるとは！！ 普通商品では使用価値と価値とは比べようもない無縁な異質物なのに、労働力商品では使用価値と価値とはけっきょく等質の異量物に姿をかえてあらわれる忍者まがいのしろ物どうしであろうとは！ こうした決定的な特殊性を基盤としてはじめて、労働力商品は“貨幣の資本への転化”，近代資本主義の開幕にもっとも重要な役割を演じたのだった。そこで、つづいて労働力の価値と使用価値の内容について、また両者の関係について、かんたんにみることにしよう。

- (1) いまさら説くまでもないが、労働力が価値をもつのは、労働力が労働の生産物・商品だからである。しかし、労働はそれじたい商品ではないので、価値をもたない。商品が価値をもつのは、商品が人間労働の生産物であり、価値は抽象的人間労働の結晶だからである。「流動状態にある人間労働力、いいかえれば人間労働は価値をつくるが、価値ではない。人間労働は凝結した状態で、対象的な形態で価値になる」(Das Kapital, Bd. I., S. 56.)。「労働は諸価値の実体であり、内在的尺度であるが、それじたい価値をもたない。(改行)“労働の価値”という表現では、価値概念がすっかり消えるだけではなく、逆転される。それはたとえば、土地の価値といったようなひとつの架空の表現だ」(a. a. O., Bd. I., S. 562. [傍点—原著者])。天然の土地は人間労働の生産物ではない。“価値”のない未墾地に“価格”〔架空の価格形態〕はあるとしても (Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 108.)。

さきにもみたように、『資本論』では、労働力の使用価値(労働力の支出、使用、消費)は、普通商品の使用価値・価値を生産する労働にかかわるものであり、かんたんには片づけられないので、その説明はあと回しに。そして比較的かん略に処理できる労働力の価値規定からまず説かれる。もっとも労働力の価値(価格=賃金)の問題も、労働力の使用価値によって同時生産される剰余価値との関係(価値生産物  $v+m$ )<sup>(2)</sup>でくわしくあとあと再論されている。ところで、労働力の使用価値は、あとでみるように、普通商品の使用価値とはまったくちがうものとなっているが、労働力の価値も、さほどではないにせよやはり、形成のうえでは普通商品の価値とはかなりなちがいをみせる。人間の体外にある

普通商品の価値は、ほんらいそれらの商品が生産される過程——流通過程にまで延長された生産過程<sup>(3)</sup>をふくめて——での労働（2重性の労働）によってそれらの使用価値とともに形成されるのだった。ところが、労働力商品の価値の形成はちがう。労働力は、じぶん自身が活力にみちた商品としてつくられ、商品としての価値を形成されるためには、普通商品とはちがひ、生産工場などのような労働の現場にはいるのではない。むしろ、労働力の所有者はその日その日に労働力の使用価値を支出し・労働した生産工場から自分じしんを自宅・宿舎に引きあげ、労働からはなれて、飲食・休息・睡眠などをたのしむことによって、はじめて体内の労働力商品を日々再生産することができる。労働力商品の使用価値も価値も労働によって直接に生産されるのではない。むしろ、労働力の所有者が自ら労働すると、労働力の使用価値は支出され・消えてしまい、また自ら労働すると、体力の消耗は回復せず、労働力は商品として再生産されず、その価値は形成されない。だから、労働力商品は、普通商品のように労働によって直接につくりだされるもの、ではない。むしろ逆だ。労働力商品の再生産のためには、その所有者は自分の直接の労働からはなれなければならない。また当然なことながら、労働力所有者の労働力は他人の労働によって直接に生産・再生産される（労働対象となる）ものでもない。とはいっても、労働力商品が労働とはまったく無関係に再生産されるのかといえば、けっしてそうではない。労働力商品の再生産に役立つ衣・食・住（それらに加わる文化的諸要因<sup>(4)</sup>、しかも労働力の永続化・世代交替のためには家族全員分をふくめて<sup>(5)</sup>）は、すべて労働の生産物である諸普通商品なのだから。体力の総合でいいあらわされる労働力商品（それじたいが使用価値であるとともに価値でもある）は、普通商品を生産することによって消費されるが、普通商品を消費することによって再生産される。したがって、労働力商品の再生産は、直接にはなく間接に、社会的・平均的な必要労働量（2重性の労働量）と大きくかかわっている。労働力商品の価値は、必要労働量（必要労働時間）としては、だから労働力の再生産に必要な諸商品の価値（抽象的人間労働量の結晶<sup>(6)</sup>）によって間接的に決定されることになる。そうであるいじよ

う、労働力商品の価値もまた結論としては間接的ながら、商品の生産に必要な労働時間で定まる、といえよう。そこに、労働力商品の価値がもつ“特殊性”の限界がみられる。

(2) Vgl. Das Kapital, Bd. I., S. 533-91.

(3) Vgl. a. a. O., Bd. II., S. 146.

(4) 「……いわゆる 必要な諸欲望の範囲は、それらの充足の方法と同じくそれじしん歴史的な産物であり、したがって大部分は1国の文化程度にかかっており、なかでも本質的には自由な労働者階級がどんな条件のもとで、またどんな慣習と生活要求をもって形成されてきたかにかかっている。だから、他の諸商品とは反対に、労働力の価値規定は、1つの歴史的な、そして道徳的な要因をふくんでいる。それでもなお、一定の国にとって、一定の時期には、必要な生活資料の平均範囲があたえられている」(Das Kapital, Bd. I., S. 179. [傍点—原著者])。

(5) 「労働力の所有者はいずれ死ぬだろう。だから、貨幣の資本への継続的転化が前提されるように、労働力の所有者が市場に継続して出場しなければならないとすれば、労働力の売り手は永続しなければならない。……摩擦と死によって市場から引きあげられた労働力は、最少限度でも同数の新しい労働力によってたえず補充されなければならない。労働力の生産に必要な諸生活手段の総額は、だから補充人員の諸生活手段、すなわち労働者連の子供たちの諸生活手段をもふくんでいる。こうして、この独特な商品所有者族は、商品市場で永続化することになる」(a. a. O., Bd. I., S. 179.)。

(6) 「労働力の価値は、どの他の商品の価値ともおなじように、この特殊な商品の生産、したがってまた再生産に必要な労働時間で定まる(間接的、そしてまた結論的にいえば—飯田)。それが価値であるかぎり、労働力じしんは、ただその中に対象化された社会的な平均労働の一定量を代表するだけだ。労働力は、生きている個人の素質としてしか存在しない。したがって、労働力の生産は個人の生存を前提とする。個人の生存が与えられたものとすれば、労働力の生産はかれ自身の再生産また保持のなかで成立する。生きている個人は、じぶんの保持のためには、一定量の生活手段を必要とする。労働力の生産に必要な労働時間は、だから、これらの生活手段の生産に必要な労働時間に戻着する。いいかえれば、労働力の価値は、その所有者の保持のために必要な生活手段の価値である」(a. a. O., Bd. I., S. 178. [傍点—原著者])。

労働力は、その所有者の日々の労働で疲れはてた体力が日々復活・平常化することによって、商品として日々再生産される。「商品形態をとることなしには、貨幣は資本にならない」(さきに引用)というのは、 $G-W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W'$ —

G' 方式の一環である  $G-W < \frac{A}{P_m}$  の重要性を指摘したものである。生産過程をへて G がやがて G' ( $G+\Delta G$ ) に転化する動因となる  $G-W < \frac{A}{P_m}$  のうち主役を演ずるものが A (労働力) である。ところが、労働力が生産過程にはいる前段階・流通過程では、労働力はまだその使用価値をなかに保有したままの商品としてその価値を実現するだけである。その価値実現は——貨幣の流通手段機能によろうと、支払手段機能によろうと——<sup>(7)</sup>商品流通の純粋な法則にしたがって、価値どおりにおこなわれるものと前提される。すべての普通商品にみられるのとまったくおなじく、商品から貨幣へ (あるいは貨幣から商品へ) の流通過程では商品と貨幣とは等価交換される。流通過程のなかでは、貨幣は商品の転化形態として機能するだけであって、そのばあい価値の転形は生じて、価値の増殖はおこらない。貨幣の資本への転化は、歴史のさいしょにも、その後の日々にも、流通過程のなかではおこなわれない。とはいっても、流通過程での労働力の商品化 (労働力商品の消費→普通商品の生産過程への導入契機) が、歴史の段階を皮ぎりに日常くりかえしおこなわれるのでなければ、“貨幣の資本への転化” ははじめからなかったろうし、現在にもないことだろう。その意味で、流通過程へのこの独特な労働力商品の出現がとりわけ重視されなければならないわけだ。ここでも、商品の流通過程をへなければ、商品 (別の商品) の生産過程ははじまらない。そこで、「……資本は流通からは発生しえないが、おなじく流通からは発生しえないのでもない……」(さきに引用) と強調されるしだい。しかし、もっと重視・強調されなければならないのは、くりかえすが、流通過程のなかでは「見えないその背後にある」<sup>(8)</sup>、「流通とはちがうどこから」剰余価値が生じうるのかを知ることだ。

- (7) 労働力は日々再生産・更新されなければ、労働の源泉をもつ商品として売買されえない。とはいっても、長期契約で雇用が確保されている労働者は日々労働市場に出かける必要はもちろんない。しかし、労働力の商品化は日々くりかえされている。きのうの労働力商品はもうきょうはない、その価値も使用価値も消え去っているのだから。ところで、さいしょ“エンクロージュア”運動で諸物の所有からはじき出された歴史的段階には、その所有者・売り手はいっばんに労働力以外にはなに1つ売るべき

商品も、ましてや生活を一定期間支えるほどの貨幣も持っていなかったらう。だから、売り手の労働力所有者に対応する買い手の貨幣所有者は生産手段だけでなく生活手段の持ち主でもあった(Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 178.)。それで、労働力商品の価値が貨幣形態であれ、実物形態であれ、まず実現されなければならなかった。ところが、労働力商品の所有者の生活がいくぶん安定した社会では、労働力の売り手は生産過程で労働力の使用価値を提供(労働)したあとに、労働力の価値(貨幣形態としての価格=賃金)を週給・月給などとして受けとる(「……どこでも、労働者が資本家に労働力の使用価値を前貸しする。かれは、その価格の支払いをうけるまえに、買い手に労働力を消費させている」[a. a. O., Bd. I., S. 182. 傍点—原著者])。おなじような文章はほかのページにもみられる。Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 543, 566, 595. しかし、逆に資本家が労働者に前貸しするとも記されている。「……労働力の購買にさいして資本家によって前貸しされた貨幣、労働者じしんによって生活資料に支出された貨幣……」(a. a. O., Bd. I., S. 217.)。資本家の側からみると、労働力の使用価値を使った(労働させた)あとで労働力の価値を支払うとしても、その労働の生産物を資本として実現し、支払い賃金額を回収できるのは生産過程に後続する再流通過程でのことだ。そうなると、資本家にとっては、資本の収支関係からみて、労働者に賃金が前貸しされたとも考えられよう(Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 558, 596.)。たしかに、労働者は労働力の価格(賃金)を受けとるまえに労働する。ところが、げんに資本家は労働の結果(新価値)を貨幣形態で受けとるまえに労働力の価格を支払っている。それでか、マルクスはこう結論づけている。「労働力はあとになってやっと支払われるといっても、売られている。だが、関係を純粹に把握するのには、労働力の所有者はその販売とともにいつも即座に契約でとりきめられた価格(賃金—飯田注)を受けとる、というふうにさしあたり前提するのが便宜だ」(a. a. O., Bd. I., S. 183.)。

- (8) 「資本の歴史的存立諸条件は、商品流通・貨幣流通だけで事たりるといったものではけってない。生産手段と生活手段の所有者が、自由な労働者をじぶんの労働力の売り手として市場に見つけるばあいだけ、資本は成立する。そしてこの1つの歴史的條件が1つの世界史を包括している。だから、資本はさいしょから社会的生産過程の1エポックを予告する」(a. a. O., Bd. I., S. 178. [傍点—原著者])。「……貨幣の資本への転化は、流通部面のなかでおこるが、そこではおこらない。流通の媒介によって、なぜなら、商品市場での労働力の買いによって条件づけられているのだから。流通のなかではおこらない、というわけは、流通は生産部面のなかでおこる価値増殖過程を導入するだけなのだからだ」(a. a. O., Bd. I., S. 203. [傍点—原著者])。

労働力商品の所有者が生産過程で消耗しつくした労働力の使用価値をとりか

えすために、労働力商品・体力を回復・再生産しなければならないのは日々のことだが、この再生産は、うえにみたように、労働力の使用価値がふたたび行われる生産過程にはいるまえに完了しなければならない。ところで、労働力商品の再生産のうえで必要な労働時間によって間接的にきめられる労働力の価値水位は社会関係の文化水準の発展におうじて次第に高まるとしても、労働力の使用価値がやがて発動して生産過程でつくりだす価値量を上回ることはない。万が一にも、労働力の価値が労働力の使用価値（労働→価値）と等しかったり、上回ったりするものだったら、さいしょから労働力は商品にはならなかったろう。労働力の買い手はムダゴトを重ねるか、多く支払って少なく受けとることによって、貨幣をどんどん失うことになるだろうから。だから、逆に労働力の使用価値をつかえば出てくる労働→価値を労働力の価値以上に高めようと買い手・資本家がどれほど工夫と努力を重ねてきたことか。その激しい争いが資本主義経済をこんなにも進展させる1つの大きなカギとなったともいえよう。では、問題の原点にかえて、労働力の使用価値がなぜ価値の源泉なのか、そこから出てくる価値がなぜ労働力の価値を上回ることになるのか。買い手・資本家はどのように剰余価値を増大しようとしているのか。剰余価値生産の核心にせまる労働力商品の使用価値の問題へすすもう。

(未完) (1980. 8. 1. 稿)